

老境をゆたかに

文学にみる老人像

二田英彬

時事通信社

老境をゆたかに

文学にみる老人像

三田英彬

時事通信社

著者紹介

三田 英彬 (みた・ひであき)

1933年北海道生れ。

慶応義塾大学大学院修了。現在、ルポライター、文芸評論のかたわら、上田女子短期大学教授、国学院大学講師を勤める。

主著は『岩野泡明論』(桜楓社)、『泉鏡花の文学』(桜楓社)、『北方領土』(講談社)、『棄てられた四万三千人』(三一書房) その他。

老境をゆたかに——文学にみる老人像 定価 1400円

昭和58年7月5日 発行

著者 三田 英彬

発行者 岡田 舜平

発行所 株式会社 時事通信社

東京都千代田区日比谷公園1-3 〒100
電話東京(591)1111 振替 東京4-85000

印刷所 株式会社 太平印刷社

製本所 大口製本印刷株式会社

©1983, HIDEAKI MITA

(落丁・乱丁はお取替えいたします)

0095——3199

老境をゆたかに——文学にみる老人像

目次

はじめに 3

第一章 幸福

薄幸のうちに学んだ「幸福の技術」——『幸福』宇野千代 8

老境にいて知る此の世、気ままの楽しさ——『此の世』中里恒子 22

現代老人の幸福度 32

第二章 威厳と親子関係

アフリカの部族に見る長老の威厳 44

六十歳で息子を得、甦った亡父への敬慕——『父の乳』獅子文六 58

帰って来た家出人と骨肉の情——『父帰る』菊池寛 69

漱石作『それから』や直哉、荷風の父子対立 80

あまりにも日本的な母子関係(一)——『浮雲』『舞姫』から『ある女の生涯』 82

あまりにも日本的な母子関係(二)——『不幸な母の話』から『海辺の光景』 87

第三章 性

若い異性に癒される不調和とやさしさと——『老人』志賀直哉 96

不能になつても性生活はある——『瘋癲老人日記』谷崎潤一郎 105

永劫の虚無に燃え立つ老境の性——『眠れる美女』川端康成 116

熟達の老年にして初めて完成する恋愛——『変容』伊藤整 129

同窓生三様のインテリ老人の性——『年の残り』丸谷才一 138

高齢、熟達の性 148

第四章 エゴイズム

末期の眼に自足できぬ孤独地獄と家族のエゴ——『玄鶴山房』芥川龍之介 156

現代の嫁や孫たちのエゴと老母の心情——『赤い貝の舟』佐江衆一 168

第五章 ぼけ

無用者扱いの孤独地獄から恍惚へ——『厭がらせの年齢』丹羽文雄 180

毫碌に軽重あり、軽度はなおる——『母の晩年』（丹羽文雄）と世間の現実 189

第六章 孤独・趣味・生

人は社会的動物 200

俗事を離れ、自然に親しむ日々——『閑な老人』尾崎一雄 202

現役意識をかなぐり捨てて——『壇の中の水』藤枝静男 208

不屈の生、『老人と海』のサンチャゴ老人 212

第七章 死生観

幽界への往来自在、生への執着を超える——『縷紅新草』泉鏡花 228

我執は滅し得るか——『檀山節考』深沢七郎

239

土壇場でキリストにすぎた白鳥の死

257

のがれがたい病に燃え立つ——『われはうたへど

やぶれかぶれ』室生犀星

260

あとがき

老境をゆたかに——文学にみる老人像

はじめに

現在、すでに高齢化社会に入っています。それにしても、マスコミ等で問われていることの多くは、健康Ⅱ肉体の問題であったり、経済生活のことであったり、福祉制度のこと、あるいは老人心理であったりで、かならずしも魂の問題、精神の劇ではなさそうです。一説に、老人問題の中で、「死」のことを扱うのはタブーなのだという話すら聞いたことがあります。ほんとうは、心のありよう、ひいては生き方のほうが、いちばん大事ではないのか、という気にさせられます。

そして、それをたずねるよすがとしては、文学作品がもっともふさわしいと、考えられるのです。老人を主人公にしているわが国の近代小説、老境を描いている作品をと探しつつ、生き方を問うてみることにしました。

それにしても、わが国の近代文学を眺めわたした場合、明治四十年前後に、自然主義が文壇の

主流を占めて以降、自分の身边や心境を吐露する傾向が、支配的だったわけですから。で、老人像となると、その作家が老境に入ってから作品に待つということになりかねません。

ところが、わが国の作家には、道なれば、斬り死に同様に倒れた人が、存外目立ちます。それはほとんど夭折という錯覚を与えてくれるほどのものです。長寿を全うし、それも枯淡な隨筆などということではなしに、小説を書き続けた人は、そんなに多くはないと思われまふ。

そういうわけで、老人を主人公にした作品は少ないか？

青春をテーマにしたもの、いや中年者や初老の人物を扱ったものよりも少ないでしょう。けれども、見る側に立つて描いたものもむろんあるし、作者自身が老境にはいったわけではないのだけれど、晩年意識を抱き、死をみつめ、老人を素材にしたというそんな作品もあります。前者では、家とか親子関係を問題にすえたとすれば、当然出てくることではあるし、また、前者も後者もひっくるめて、人間の生死という根源的な問題を追求するとき、やはりとりあげられたのだという点でもあります。私は作品を探してみても、まずはそんな印象を抱きました。

老境を扱った文学作品には、作家が熟達の境に入ってから描いたものが比較的に多い。思えば当然ですが、それだけすぐれた作品があるということです。若いときに、それぞれに文学的主張を、文学運動的エコールを抱いて書いた作品を、いわゆる文学史では並べがちで、それにもそれ

なりのおもしろさがありますが、しかし、稚書きとしか見えないものもまたあります。それに比べれば、人生の至妙を知悉して描いているものが多いということです。もちろん、描かれている老人像はそれぞれに異なります。かくありたいと思う人物もいれば、ああはなりたくないというケースもあるわけです。一からげでは論じられないところが、それぞれの生き方です。

一口に近代といいますが、それは今日たいたいまふくむ用語として使っています。老境を、そこにおける精神の劇をたずねるに、ほぼ百年はけみした日本近代の小説からと意図したのは、それがわれわれの生活にとって、身近であろうと考えたからにほかなりません。小説が、時代、社会の鏡となるものであることを思い、ほとんど世界の実験室的に特殊な発展をみせたわが国の近代においては、今日の老境を考えるについても、他へ広げるよりも、身近に自分たちの問題として、引き寄せられるだろうと思つたのです。

ところで、一本にまとめるにあたつて、当初、文学作品を緒口に、さらに現実の社会でのありようまで、取材するなり調査データを収集するなりして、広げてみようかという考えが、きざさなかつたわけではありませんでした。けれどもしよせん別なものであることもたしかなのです。

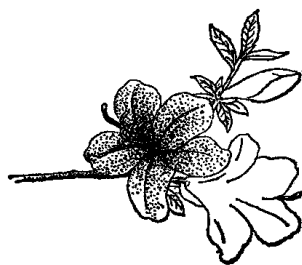
文学作品が提起しているなかには、緒口になるどころか、実際の社会に、くさびのように突き刺さってきたり、ときには、毒を吹き込んでいる場合すらあるのです。

また、別して、抽出してみたわが国の近代小説が、社会の十全な鏡となりえているかといえ
ば、これはさにあらずで、わが国の作家の作品には、社会的広がりの中でものを考えたり、作品
を展開したりという幅の広がり、どうしても少ない。個人的な世界に沈潜しているものが多い
といえます。私小説の瀾漫に典型的で、これには急激な変貌を続けた近代社会との関わりから、
日本語による言語表現の問題までからむでしょう。

以上、文学が抱懐する本質的なことと、わが国近代小説の特殊事情を併せてみれば、作品を緒
口に、さらに、現実の社会問題として、ないし、ルポルタージュふうに追求してゆくことは、う
まく方向の重なり合うことは難しいと言ったほうがよい。木に竹をつぐような作業結果になりか
ねないはずで、むしろ、作品に基いて、思いを深めてみるほうが大切と、志したのです。

また、『十年ひとむかし』と言いますが、時代の急な展開、われわれの生活の変化からして、
一口に近代の小説といっても、今では一時代前の老人像でしかないと思われそうなお小説もあ
ります。しかしそれでも、そこで問われた問題が、今日解消しきれているかとなれば、そうで
はなく、本質的には未だにひきずっているということのほうが多いでしょう。それぞれテーマ
別に割って章を立ててみましたが、こうして、自分たちの問題として、読んでいただければ、幸
いなことと思います。

第一章 幸福



薄幸のうちに学んだ『幸福の技術』——『幸福』宇野千代

「ボッチチェリのヴィナス……」浴室の湯気の中に浮かぶ自分の裸身を鏡に映し、うっとり眺めるのが一枝の日課。七十を越えて、たった一人で生きる老女が、身辺に拾い集めた幸福のかげらの一つだ。

しかし「幸福だ」と思い込む自己肯定的な生き方の裏には、不幸の味を知り、それを恐れる者の臆病さも潜んでいた。

「幸福だ」と思い込むこと

最初に、『幸福』をテーマにした作品から入ってみます。

世間には、自分が、世界で一番不幸だと思い込んでしまう老人がいる。ことに女性に多いようです。たとえば私の知り合いで、横須賀市に住む人ですが、こんな人がいます。

一人息子を交通事故で亡くしてしまったあと、夫と二人で、暮らしてきました。ところが、こ

の連れ合いにも先立たれてしまった。そこで、こぼすのです。

「人生、思うようにはいかなかったわ。苦勞の連続でしたもん。せめて晩年は、老後こそは、のんびりしたいと思っていたのに、息子にも連れ合いにも先立たれてしまいました。お金はないし、ひとりぼっち。さびしいわ。からだもう思うとおりには動かないし、私ほど不幸せな者はいないみたい……」

たしかに氣の毒だとは思います。といって、同情してみたところでその老女にとって状態が變わるわけでもない。

彼女はまだ六十歳そこそこののです。夫が残していった土地も家もあるしほんとうは預金もあるらしい。暇もある。いや、暇だらけなのです。だが、何かをしよう、楽しもうとは、決して思わないらしい。何の趣味もない。

機会をとらえてはこぼしている。近所の、愚痴をこぼす相手に避けられてしまうと、遠くの親戚までたずねていって、自分の不幸をかこってみせています。このような例は、巷にはどこにでもよくあることでしょう。

ひとりぼっちになった寂しさというものは、これはもうどうしようもないもので、はたで慰め顔を見せたくらいでは、どう癒やしうもないこととは思います。さればといって、亡くなった